

Title	萩原弘子教授 略歴と研究業績一覧
Author(s)	
Editor(s)	
Citation	人文学論集. 2017, 35 (別冊), p.95-108
Issue Date	2017-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/15336">http://hdl.handle.net/10466/15336</a>
Rights	

## 萩原弘子教授 略歴

1951年	鎌倉（神奈川県）生まれ
1982年 9月	お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化専攻（博士後期課程）退学
1982年10月～1985年 6月	大阪女子大学学芸学部英文学科助手
1985年 7月～1992年 3月	同上 講師
1992年 4月～1999年 3月	同上 助教授
1997年 4月～2005年 3月	大阪女子大学大学院文学研究科英語学英米文学専攻担当
1999年 4月～2005年 3月	大阪女子大学人文社会学部人文学科国際文化専攻教授
2005年 4月～2012年 3月	大阪府立大学人間社会学部人間科学科教授、大学院人間社会学研究科人間科学専攻担当
2012年 4月～2016年 3月	大阪府立大学大学院人間社会学研究科人間科学専攻主担、高等教育推進機構主担、人文科学系所属教授
2016年 4月～2017年 3月	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科人間科学専攻主担、高等教育推進機構主担、人文科学系所属 教授
2009年 4月～2013年 3月	人間社会学研究科長
2013年 4月～2015年 3月	第1学群長、人文科学系長
2015年 1月～ 3月	特命副学長
2015年 4月～2017年 3月	学長特別補佐、学術情報センター図書館長

### 客員研究員、客員講師（抜粋）

1987年 9月～1989年 3月	リーズ大学芸術学部（英国）
2004年 8月～10月	ノース・カロライナ大学（アメリカ）
2009年、2013年、2014年、 2015年 8月～10月	INIVA (Institute of International Visual Arts、英国)
2015年 5月	nGbK (neue Gesellschaft für bildende Kunst、ドイツ)

### 所属学会

Royal Anthropological Institute、黒人研究学会、日本平和学会

## 萩原弘子教授 著作・論文・評論、翻訳一覧 1981～2017年

## 著作

- 1) 『解放への迷路 —イヴァン・イリッチとはなにか』 インパクト出版会、1988年。[第4章 [ジェンダー —コスモロジーと自律の牢獄] は、多少の改稿を施したものが、『日本のフェミニズム』(岩波書店) 全8巻中の第2巻『フェミニズム理論』(1994年)に所収]
- 2) 『この胸の嵐 —英国ブラック女性アーティストは語る』 現代企画室、1990年。
- 3) 『もうひとつの絵画論 —フェミニズムと芸術』(若桑みどり、萩原弘子共著) 松香堂、1991年。
- 4) 『美術史を解きはなつ』(富山妙子、浜田和子、萩原弘子共著) 時事通信社、1994年。
- 5) 『ブラック —人種と視線をめぐる闘争』 毎日新聞社、2002年。

## 論文

- 1) 「イリッチのシャドウ・ワーク論 —女性解放への溢路と迷路」『インパクション』33号、インパクト出版会(1985年1月): 64-78。
- 2) 「「ヴァナキュラー」とはなにか」『女子大文学』37号、大阪女子大学学芸学部英文学科(1985年): 17-31。
- 3) 「ジェンダー —コスモロジーと自律の牢獄」『インパクション』37号(1985年9月): 82-97。
- 4) 「消えない教会 —イリッチのキリスト教」『インパクション』40号(1986年3月): 94-109。
- 5) 「別冊か、脚注か —ワシントン「芸術のなかの女性」美術館とフェミニスト美術史の課題」『女性学研究』1号、大阪女子大学女性学研究資料室(1992年3月): 2-21。
- 6) “Off the Comprador Ladder —Tomiyama Taeko’s Work.” In *Disrupted Borders*, edited by Sunil Gupta, 55-68. London: Rivers Oram Press, 1993.
- 7) 「からだを描く女性アーティストの新しい視線」『アートの大学』145-62. DHC出版、1995年。
- 8) 「マリア・ミースの「自己決定権」論について」『女性学研究』3号(1995年3月): 52-63。
- 9) “Comfort Women, Women of Conformity —Shimada Yoshiko’s Work.” In *Generations and Geographies in the Visual Arts*, edited by Griselda Pollock, 253-65. London: Routledge, 1996. [改稿したものが以下に

- 再掲載。“Women of Conformity: the Work of Shimada Yoshiko.”  
In *An Introduction to Women's Studies*, edited by Inderpal Grewal and  
Caren Kaplan, 236-39. Boston: McGraw-Hill, 2002.]
- 10) 「性、からだ、表現 —新しい意味へのフェミニスト的展望」『シリーズ 性を問う 第4巻 表現』大庭健他編、93-148. 専修大学出版局、1997年.
  - 11) 「黒人男性性 —黒人フェミニストの視点」『現代思想』25:11、青土社 (1997年10月): 214-25.
  - 12) 「「違い」の論じ方 —「ジェンダーと階級と人種」という問題」『現代思想』25:13 (1997年12月): 50-58.
  - 13) 「解放と翼賛のあいだ —女性指導者たちの戦争翼賛をどう論じるか」『女性学研究』6号、大阪女子大学女性学研究センター (1998年3月): 30-38.
  - 14) 「母なる神 —70年代「女性神アート」のエッセンシャルリズム」『現代思想』26:5 (1998年4月): 228-40.
  - 15) 「専門教育科目としての女性学 —大阪女子大学の場合」(船橋邦子と共著)『女性学』6号、日本女性学会 (1998年11月): 71-81.
  - 16) 「表現、流通、セクシュアリティ」『現代思想』27:1 (1999年1月): 142-57.
  - 17) 「女性アーティストのふり返られ方—展覧会がつくりだす女性観、芸術観」『女性学』7号 (1999年11月): 23-42.
  - 18) 「ルーシー・リップード著*Overlay*にみる「先史時代」・「未開」志向」『女性学研究』8号 (2000年3月): 3-16.
  - 19) 「女性性器手術 (FGS) を「問題」とするのはだれか、なんのためか —1930年代と70年代の議論から」『女性学研究』8号 (2000年3月): 80-92.
  - 20) 「美術とジェンダー」『美術の理論』藤枝晃雄編、157-73. 東信堂、2002年.
  - 21) 「カタカナ語「ジェンダー」の概念を法、政策に導入したことについての問い」『女性学研究』10号 (2002年12月): 43-50.
  - 22) 「現実を写さない写真、現実をつくる写真」『ジェンダー白書 3巻 メディア』北九州市立男女共同参画センター・ムーブ編、122-38. 明石書店、2005年3月.
  - 23) “Return to an Unknown Land —Sanae Takahata’s Quest for Self.” *n. paradoxa* 20 (July 2011): 13-20.
  - 24) 「女性の正義/人種の正義 —S・ブラウンミラーが論じるエメット・ティル事件を中心に」『人文学論集』第26集、大阪府立大学人文学会

- (2008年3月) : 51-72.
- 25) 「南蛮屏風の黒人図像 — 視覚イメージの存在と研究言説における不在をめぐって」『年報 異文化研究』2号、山口大学人文学部異文化交流研究施設 (2008年3月) : 107-16.
  - 26) “Working On and Off the Margins.” In *Imagination without Borders — Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility*, edited by Laura Hein and Rebecca Jennison, 129-46. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 2010.
  - 27) “Representation, Distribution, and Formation of Sexuality in the Photography of Araki Nobuyoshi.” *Positions* 18: 11 (spring 2010) : 231-51.
  - 28) 「1980年代英国ブラック・アート展と多文化主義の政治学」『黒人研究』81号、黒人研究会 (2012年3月) : 20-26.
  - 29) 「*The Other Story*展 (1989年) 再訪 — 英国ブラック・アートと多元的モダニズム美術史の展望」『人文学論集』第30集 (2012年3月) : 17-40.
  - 30) 「代理出産 (gestational surrogacy)、人種、権力関係 — 「ジョンソン対 カルヴァート夫妻」裁判を中心に」『生殖医療倫理研究論集 創刊号 生殖技術は氾濫／反乱する』大阪府立大学・生殖医療倫理研究会 (2012年3月) : 65-92.
  - 31) 「移動の豊饒か、帝国の求心力か — *Migrations*展 (ロンドン、2012年) を読む」『論潮』5号、論潮の会 (2012年7月) : 1-16.
  - 32) 「言挙げの時代をふりかえる — 英国「ブラック・アート」の軌跡 (1)」『人文学論集』第32集 (2014年3月) : 1-21.
  - 33) 「スチュアート・ホールと1980年代英国ブラック・アート運動」『黒人研究』84号 (2015年3月) : 25-34.
  - 34) 「1980年代GLCの文化政策と「ブラック・アート」：興隆と抵抗のあいだ — 英国「ブラック・アート」の軌跡 (2の1)」『人間科学』10号、大阪府立大学紀要 (2015年3月) : 3-29.
  - 35) 「主流美術館によるブラック・アーティスト総覧展：興隆と抵抗のあいだ — 英国「ブラック・アート」の軌跡 (2の2)」『人文学論集』第33集 (2015年3月) : 83-109.
  - 36) 「1980年代末、抵抗としてのブラック・アート展：興隆と抵抗のあいだ — 英国「ブラック・アート」の軌跡 (2の3)」『人間科学』11号 (2016年3月) : 3-23.
  - 37) 「排除する風景、書き換えられる地図 — 英国ブラック女性アーティストの作品に見る場所と空間」『人文学論集』第34集 (2016年3月) : 1-26.

- 38) 「英国芸術評議会とエスニック・マイノリティ・アート政策：1986年行動計画とそれに続く議論と変化について —英国「ブラック・アート」の軌跡（3の1）」『人間科学』12号（2017年3月）：3-33.
- 39) 「新国際主義、国際主義、多文化主義：INIVA創設時の議論を中心に —英国「ブラック・アート」の軌跡（3の2）」『人文学論集』第35集別冊（2017年3月）：1-18.

#### 評論（美術評論、映画評論、書評、その他）

- 1) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (1)」『指』358号、『指』発行委員会、1981年7月.
- 2) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (2)」『指』361号、1981年10月.
- 3) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (3)」『指』363号、1981年12月.
- 4) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (4)」『指』366号、1982年3月.
- 5) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (5)」『指』368号、1982年5月.
- 6) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (6)」『指』370号、1982年7月.
- 7) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (7)」『指』372号、1982年9月.
- 8) (その他) 「ラス・カサス —負け続ける告発者 (8)」『指』375号、1982年12月.
- 9) (書評) 藤井忠俊著『国防婦人会 一日の丸とカップウ着』『指』406号、1985年7月.
- 10) (書評) ミルドレッド・コンスタンチン著『ティナ・モドッティ —そのあえかなる生涯』『指』415号、1986年4月.
- 11) (書評) 「イリッチ経由でなく —『家事労働と資本主義』」『季刊 クリティーク』6号、青弓社、1987年1月.
- 12) (書評) 藤本和子著『ブルースだってただの唄 —黒人女性のフェミニスト』『指』423号、1987年1月.
- 13) (美術評論) 「『スペクトラム』 —女の写真フェスティバル」『インパクション』56号、1989年2月.
- 14) (美術評論) “Chila Kumari Burman.” *Feminist Arts News* 3 : 1, Leeds: Feminist Arts News, summer 1989.
- 15) (美術評論) “Kumiko Shimizu —Installation Work.” *Women Artists*

- Slide Library Journal* 31/32, London: Women Artists Slide Library, January/February 1990.
- 16) (書評)「最前線にいなかった者たちの闘い —『アマンドラ』ミリアム・トラーディ著』『インパクション』62号、1990年2月.
  - 17) (美術評論)“Kindling Charcoal in Darkness —Tomiya Taeko Exhibition at Maruki Museum.” *Women Artists Slide Library Journal* 33, March/April 1990.
  - 18) (美術評論)“Choi Jae-Eun —Beyond the Orientalist Gaze.” *Women Artists Slide Library Journal* 34, May/June 1990.
  - 19) (美術評論)“Images Exploited Universally —Judy Chicago in Japan.” *Women's Art Magazine* 36, London: Women Artists Slide Library, September/October 1990.
  - 20) (美術評論)“Breaking Through the Showcase —Amanda Holiday's Video, *Employing the Image*.” *Feminist Arts News* 3: 8, August 1991.
  - 21) (美術評論)「ベネトン色に染まれ —陽気な人間賛歌、という戦略」『KULA』4号、大阪国際写真センター、1992年3月.
  - 22) (書評)「記憶を共有しようという志 —『大神島—記憶の家族』」『インパクション』76号、1992年8月.
  - 23) (美術評論)「ベネトン色の世界に死す —瀕死のAIDS患者を使ったメッセージ広告のメッセージとは」『KULA』5号、1992年10月.
  - 24) (その他)「フェミニストの美術史研究の深まり」『女性教養』481号、財団法人日本女子社会教育会、1992年11月.
  - 25) (映画評論)「シブシーの解放をはばむもの —フェミニズム映画? 『フライド・グリーン・トマト』の人種差別」『インパクション』78号、1993年1月.
  - 26) (美術評論)“Blue Abyss Edged with Sheer White —Recent Paintings by Tam Joseph.” In *Great White* (exhibition brochure), London: Greenwich Citizens Gallery, February 1993.
  - 27) (映画評論)「スパイク・リー『マルコムX』のメッセージ」『映画新聞』96号、1993年3月.
  - 28) (映画評論)「英国の黒人監督アイザック・ジュリアンの志と苦闘」『映画新聞』97号、1993年4月.
  - 29) (その他)「アフリカの少女のヘリコプターを見逃してしまわないために」『Visions』1号、AWACの会、1993年8月.
  - 30) (映画評論)「塵から生まれた娘たちの未来 —アフリカ系アメリカ人女性監督ジュリー・ダッシュ『海から来た娘たち』」『映画新聞』104号、1994年1月.

- 31) (美術評論)「黒く輝く画布と歴史認識」『同時代批評』16号、青豹書房、1994年1月.
- 32) (その他)「女性学とは何か」『女性学研究』2号、1994年3月.
- 33) (その他)「ミス・コンテストの政治学」『イヴとアダムをこえて』四国学院大学、1994年4月.
- 34) (美術評論)「プルターニュのゴーギャン —タヒチ以前のトゥーリズム」『Visions』3号、1994年7月.
- 35) (映画評論)「距離の政治学 —ミトラ・タブリジアンの写真と映像」『Image Forum』175号、ダゲレオ出版、1994年8月.
- 36) (美術評論)「生きて働く芸術をつくりだす女たち」『女子教育もんだい』1994年秋号、労働教育センター、1994年.
- 37) (美術評論)「歴史に強いられた沈黙 —富山妙子のハルビン・シリーズ」『Silenced by History』現代企画室、1995年.
- 38) (美術評論)“Edgy Blues —Joseph’s Paintings, *Great White.*” *Third Text* 30, spring 1995.
- 39) (映画評論)「危機のなかを自由に生きるには」『フレッシュ・キル』(シュー・リー・チャン監督、1994年)上映カタログ、パンドラ、1995年.
- 40) (美術評論)「[アボリジナル・アート]の今日—「ブーム」の意味」『Visions』4号、1995年7月.
- 41) (その他)「メディアの女性像、偏りを見抜く力を」『毎日新聞』1995年10月28日.
- 42) (美術評論)「慰安と翼賛のコントラスト—嶋田美子展から」『インパクション』91号、1995年4月.
- 43) (美術評論)「アジアと日本のモダニズムをめぐるふたつの問題点」『BT／美術手帖』美術出版社、1996年1月.
- 44) (美術評論)“Sometimes the First.” *Women’s Art Magazine* 68, 1996.
- 45) (美術評論)“Silenced by History—Tomiyama Taeko’s Harbin Series.” *Third Text* 33, spring 1996.
- 46) (映画評論)「白々と明るいつくりものの家庭 —出光作品の母、息子、娘」『加恵、女の子でしょ』(出光真子監督、1996年)、上映カタログ、パンドラ、1996年. 出光真子ウェブサイトにも掲載、  
[http://www.makoidemitsu.com/www/home\\_j.html](http://www.makoidemitsu.com/www/home_j.html).
- 47) (書評)池田明子著『頼山陽と平田玉蘊』『女子教育もんだい』68号、1996年夏.
- 48) (美術評論)「文化的越境 —だけれが、どこから、どのように」『木野評論』京都精華大学、1997年3月.
- 49) (その他)「表現の不自由、不平等とは —女が性的脅威を表現するこ



- との困難について」『女性学研究』5号、大阪女子大学女性学研究センター、1997年3月。
- 50) (その他)「「連帯」の政治学 — 「同じ女」と「遠い他者」のあいだ」『飛礫』15号、つぶて書房、1997年7月。
- 51) (その他)「メディアと暴力、メディアの暴力」『女性学連続講演会』大阪女子大学女性学研究センター、1997年。
- 52) (その他)「ジェンダーというカタカナ語への違和感」『月刊フォーラム '90』社会評論社、1997年11月。
- 53) (美術評論)“Here History Unfolds.” In *Tam Joseph — This is History* (exhibition catalogue), edited by Eddie Chambers, December 1997.
- 54) (映画評論)「遠くの他者 — トリン・T・ミンハの映像『ルアッサンブラージュ』の問い」『創文』395号、創文社、1998年1月。
- 55) (美術評論)「写真という虚構、写真という現場」『Women/ Visual Arts』、サード・ギャラリー綾、1998年。
- 56) (映画評論)「バスに乗れ — スパイク・リー監督作品『ゲット・オン・ザ・バス』」『映画新聞』148号、1998年4月。
- 57) (映画評論)「再生産される人種主義、黒人問題の構造を描写 — 『ゲット・オン・ザ・バス』を見て」『朝日新聞』1998年6月9日。
- 58) (書評) W・J・T・ミッチェル著『イコノロジー』『國文學』43:10、學燈社、1998年9月。
- 59) (書評) 鈴木杜幾子、千野香織、馬淵明子編『美術とジェンダー — 非対称の視線』『國文學』43:10、1998年9月。
- 60) (その他)「文献解題 ベル・フックス著『ブラック・フェミニストの主張 — 周縁から中心へ』」『国立婦人教育会館研究紀要』3号、2000年1月。
- 61) (その他)「何への男女共同参画か」『女たちの21世紀』21号、アジア女性資料センター、2000年1月。
- 62) (映画評論)「映画評『クッキー・フォーチュン』」『ひょうご部落解放』93号、一般社団法人兵庫部落解放・人権研究所、2000年5月。
- 63) (その他)「「不穏当」な観者となるために」『女たちの21世紀』23号、2000年7月。
- 64) (映画評論)「映画評『アメリカン・ヒストリーX』」『ひょうご部落解放』94号、2000年7月。
- 65) (映画評論)「映画評『ザ・ハリケーン』」『ひょうご部落解放』95号、2000年9月。
- 66) (映画評論)「映画評『英雄の条件』」『ひょうご部落解放』96号、2000年11月。

- 67) (書評)「闊達な批判精神をもつ人、理性をもって考察する作業が始まる (『輿謝野晶子評論著作集』)『週刊読書人』2369号、2001年1月.
- 68) (映画評論)「映画評『デルタ地帯で』」『ひょうご部落解放』97号、2001年1月.
- 69) (映画評論)「映画評『リトル・ダンサー』」『ひょうご部落解放』99号、2001年5月.
- 70) (映画評論)「映画評『ルムンバの叫び』」『ひょうご部落解放』101号2001年9月.
- 71) (映画評論)「映画評『猿の惑星』」『ひょうご部落解放』102号、2001年11月.
- 72) (映画評論)「真相に迫る映画『ルムンバの叫び』、暗殺に「欧米」関与の疑い濃く、今なおアフリカの自立を阻む要因に」『毎日新聞』2001年12月21日.
- 73) (映画評論)「映画評『秘密』」『ひょうご部落解放』103号、2002年1月.
- 74) (映画評論)「映画評『スパイ・ゲーム』」『ひょうご部落解放』105号、2002年6月.
- 75) (その他)「ベル・フックス『私は女ではないのか』」『フェミニズムの名著50』江原由美子、金井淑子編、平凡社、2002年7月.
- 76) (美術評論)「身体表現 —エロスと暴力の現場として、あるいは……」武蔵野美術大学ウェブサイト *Culture Power*、2003年6月.  
[http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/gender\\_research/hagiwara\\_hiroko/interview.html](http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/gender_research/hagiwara_hiroko/interview.html).
- 77) (映画評論)「あらかじめの視線の構図 —さらされた死体から始めて」『D/SIGN』5号、太田出版、2003年9月.
- 78) (美術評論)「神秘化する視線」『D/SIGN』7号、2004年4月.
- 79) (映画評論)「熱帯の楽園ジャマイカの真実 —ドキュメンタリー映画『暮らしと債務』」『いこる』創刊号、働く女性の権利センター、2004年4月.
- 80) (映画評論)「実は甘くないアメリカ深南部の愛 —『チョコレート』」『いこる』2号、2004年8月.
- 81) (映画評論)「晴れない霧 —ドキュメンタリー映画『フォッグ・オブ・ウォー』」『いこる』3号、2004年12月.
- 82) (映画評論)「龍が語る中国現代史 —『失われた龍の系譜』」『いこる』4号、2005年3月.
- 83) (映画評論)「アフリカの村の輝きと、憂鬱な確信 —『ムーラーデ』」『いこる』5号、2005年6月.
- 84) (映画評論)「ヴェラは悔い改めるか —『ヴェラ・ドレイク』」『いこる』

- 6号、2005年9月。
- 85) (書評) 川島慶子著『エミリー・デュ・シャトレとマリー・アントワネット —18世紀フランスのジェンダーと科学』『ふえみん』婦人民生新聞、2005年9月5日。
- 86) (美術評論)「現代ソウェトの子どもたち」『前夜』6号、影書房、2006年1月。
- 87) (映画評論)「戦争直後のヒロヒトを描く —『太陽』」『いこる』7号、2006年1月。
- 88) (美術評論)「アラバスクが侵す定番の風景写真」『建築ジャーナル』1110号、2006年2月。
- 89) (映画評論)「問題は支配者の病気なのか —『ザ・コーポレーション』」『いこる』8号、2006年4月。
- 90) (美術評論)「夕闇を待って見える女性労働者の歴史」『建築ジャーナル』1103号、2006年5月。
- 91) (映画評論)「南アフリカのいまを伝える —『ツォツィ』」『いこる』9号、2006年夏。
- 92) (美術評論)「受難の絶えないこの世の家から」『建築ジャーナル』1108号、2006年8月。
- 93) (映画評論)「公開中の映画『母たちの村』—アフリカ像変更迫る」『毎日新聞』2006年10月13日。
- 94) (映画評論)「哀しくも醜い女性の欲望 —『南へ (Vers le Sud)』」『いこる』10号、2006年秋。
- 95) (美術評論)「金の靴でたどる不可能な夢の旅路」『建築ジャーナル』1112号、2006年11月。
- 96) (書評)「制度的知識への深い疑い —ベル・フックス著『とびこえよ、その罫いを』」『図書新聞』2811号、2007年2月24日。
- 97) (映画評論)「内戦を「部族抗争」と見る視線 —『ルワンダの涙』」『いこる』11号、2007年春。
- 98) (映画評論)「社会派映画のなかの地獄としてのアフリカ —『ブラッド・ダイヤモンド』」『関西・南部アフリカ・ネットワーク通信』45号、2007年5月。
- 99) (映画評論)「黒人ユダヤ人のイスラエル「帰還」—『約束の旅路』」『いこる』12号、2007年夏。
- 100) (映画評論)「女たちが繋がることへの恐怖 —『あるスキャンダルの覚え書き』」『いこる』13号、2007年秋。
- 101) (映画評論)「語るサバイバー、語らないサバイバー —『フリーダム・ライターズ』」『いこる』14号、2007年冬。

- 102) (美術評論) “Cogent Cognition —Art of Tam Joseph.” In *L’Art de Tam Joseph* (exhibition catalogue), edited by Tam Joseph, Nimes: Galerie de l’Ombre, 2008.
- 103) (映画評論) 「閉じた情緒のなかの「日本の母」—『母(かあ)べえ』『いこる』15号、2008年春.
- 104) (書評) 「性暴力と対峙するうえで範としたい粘り強く現実に眼を凝らす姿勢 —宮地尚子編著『性的支配と歴史 —植民地主義から民族浄化まで』」『図書新聞』2875号、2008年6月28日.
- 105) (映画評論) 「永田洋子をどう描いているか —『実録連合赤軍—あさま山荘への道程』」『いこる』16号、2008年夏.
- 106) (映画評論) 「よその女の交情を見たいという欲望 —『中国の植物学者の娘たち』」『いこる』17号、2008年秋.
- 107) (映画評論) 「デジタル世界と化したアフガニスタン —『君のためなら千回でも』」『いこる』18号、2008年冬.
- 108) (映画評論) 「帰郷しなかった者たちと歌う —『ユッサー・ンドゥール 魂の帰郷』」『いこる』19号、2009年春.
- 109) (映画評論) 「一種のヴェトナム戦争映画 —『グラン・トリノ』」『いこる』20号、2009年夏.
- 110) (映画評論) 「移民の恐怖とギャングの悲しみ —『シン・ノンブレ』」『いこる』21号、2009年秋.
- 111) (映画評論) 「こんな世界を渡すのか —『それでも生きる子供たちへ』」『いこる』22号、2009年冬.
- 112) (美術評論) 「移動と暴力を表現する—『ホーキンス通商』展とイギリス・ブラック・アーティスト」『Migrants’ ネット』127号、移住労働者と連帯する全国ネットワーク、2010年2・3月.
- 113) (映画評論) 「不幸ではあっても地獄ではない —『アフリカン・ソルジャー：少女兵士の戦場』」『いこる』23号、2010年春.
- 114) (映画評論) 「技術的稚拙と新しい危機 —『プレシヤス』」『いこる』24号、2010年夏.
- 115) (映画評論) 「家族の一員、のようなもの —『メイド』」『いこる』25号、2010年秋.
- 116) (映画評論) 「この国の男と女の関係は —『母をたずねて1800マイル』」『いこる』26号、2011年冬.
- 117) (映画評論) 「シネマな視点『しあわせの雨傘』」『はらっぱ』316号、公益社団法人子ども情報教育研究所、2011年4月.
- 118) (映画評論) 「30数年前の記憶 —『マチュカー僕らと革命』」『いこる』27号、2011年春.

- 119) (映画評論)「シネマな視点『ヴィヨンの妻 —桜桃とタンポポ』』『はらっぱ』319号、2011年7月.
- 120) (映画評論)「ウィルバーフォースよりも…… —『アメイジング・グレイス』』『いこる』28号、2011年夏.
- 121) (映画評論)「シネマな視点『未来を生きる君たちへ』』『はらっぱ』322号、2011年10月.
- 122) (映画評論)「発言する女、泣く男 —『別離—ナーデルとスイミー』』『いこる』29号、2011年秋.
- 123) (映画評論)「シネマな視点『テザ —働哭の大地』』『はらっぱ』325号、2012年1・2月.
- 124) (映画評論)「頭は揺さぶっても—『マンダレイ』』『いこる』30号、2012年冬.
- 125) (映画評論)「横領された物語 —『ヘルプ —心がつなぐストーリー』』『いこる』31号、2012年春.
- 126) (映画評論)「変革は女から —『法的な姉妹たち』』『関西・南部アフリカ・ネットワーク通信』46号、2012年5月.
- 127) (映画評論)「シネマな視点『イブラヒムおじさんとコーランの花たち』』『はらっぱ』328号、2012年5月.
- 128) (映画評論)「暴力の記憶とジャガイモの象徴世界 —『悲しみのミルク』』『いこる』32号、2012年夏.
- 129) (映画評論)「シネマな視点『正義のゆくえ』』『はらっぱ』331号、2012年8月.
- 130) (映画評論)「戦争映画の意味を考えたいけれど —『ジョニー・マッド・ドッグ』』『いこる』33号、2012年秋.
- 131) (映画評論)「シネマな視点『Sweet Sixteen』』『はらっぱ』334号、2012年11月.
- 132) (映画評論)「レバノン —予想外の希望の系譜—『灼熱の魂』』『いこる』34号、2013年冬.
- 133) (映画評論)「シネマな視点『13歳の夏に僕は生まれた』』『はらっぱ』337号、2012年2月.
- 134) (映画評論)「ハリウッドの歴史をふりかえってしまう —『ジャンゴ 繋がれざる者』』『いこる』35号、2013年春.
- 135) (映画評論)「巨悪に迫らないもどかしさ —『オレンジと太陽』』『いこる』36号、2013年夏.
- 136) (映画評論)「新しい苦しみ、新しい世界 —『2番目の妻』』『いこる』37号、2013年秋.
- 137) (映画評論)「アーレントの沈黙、曖昧、矛盾は? —『ハンナ・アー

- レント』『いこる』38号、2014年冬.
- 138) (映画評論)「映画製作についての省察 —『ザ・ウォーター・ウォー』』『いこる』39号、2014年春.
- 139) (映画評論)「夜は明けたか? —『それでも夜は明ける』』『いこる』40号、2014年夏.
- 140) (映画評論)「発見された女性写真家の謎 —『ヴィヴィアン・マイヤーを探して』』『いこる』41号、2014年秋.
- 141) (映画評論)「日本社会に突き刺さる言葉 —『孤独なツバメたち —デカセギの子どもに生まれて』』『いこる』42号、2015年冬.
- 142) (映画評論)「勝ち取ったのではなかったか? —『マンデラ —自由への長い道』』『関西・南部アフリカ・ネットワーク通信』50号、2015年4月.
- 143) (映画評論)「ポーランド現代史を生きた少数者の歌 —『パパーシャの黒い瞳』』『いこる』43号、2015年春.
- 144) (映画評論)「腹立たしい沈黙の意味は? —『グッド・ライ —いちばん優しい嘘』』『いこる』44号、2015年夏.
- 145) (映画評論)「危機に際して「地の塩」でありたい —『セバスチャン・サルガド—地球へのラブレター』』『いこる』45号、2015年秋.
- 146) (映画評論)「逃避行の果ては —『独裁者と小さな孫』』『いこる』46号、2016年冬.
- 147) (その他)「論文作成法、研究倫理、研究公正 —博士前期課程「コミュニケーション・デザイン特論」担当から考える」『RI』1号、大阪府立大学21世紀科学研究機構、研究公正インスティテュート、2016年3月.
- 148) (映画評論)「诗情あふれる革命と連帯の記憶 —『怒りのキューバ』』『いこる』47号、2016年春.
- 149) (映画評論)「映画による復讐という物語は —『イングロリアス・バスターズ』』『いこる』48号、2016年秋.
- 150) (映画評論)「内戦の怖さと平和への希求 —『イノセント・ボイス』』『いこる』49号、2017年春.
- 151) (美術評論)「文化的多様性を表現する写真?」“Pictures of Diversity?” Laurie Toby Edisonウェブサイト  
<http://www.laurietobyedison.net/essay-by-hagiwara-hiroko>.
- 152) (その他)「オープンアクセス方針の策定と実施について —報告と省察」『RI』2号、大阪府立大学21世紀科学研究機構、研究公正インスティテュート、2017年3月.

### 事典項目

- 1) 「イヴァン・イリッチ」「ブラック・フェミニズム」「レイシズム」『岩波 女性学事典』岩波書店、2002年6月。
- 2) 「セクシュアリティとパフォーマンス」「芸術とジェンダー体制」『日本近現代美術史事典』東京書籍、2005年。
- 3) 「文化的モダニズム」「ニュー・アート・ヒストリー」『現代社会学事典』弘文堂、2012年。

### 翻訳書・字幕翻訳

- 1) ロジカ・パーカー、グリゼルダ・ポロック『女・アート・イデオロギー—フェミニストが読みなおす芸術表現の歴史』新水社、1992年。
- 2) グリゼルダ・ポロック『視線と差異』新水社、1998年。
- 3) ジョー・スペンス『私、階級、家族』新水社、2004年。
- 4) (DVD) サイモン・シャーマ『BBC 英国史』全15巻、丸善出版、2013年。

### 翻訳論文

- 1) アンドレ・ガンダー・フランク「イデオロギーの危機と危機のイデオロギー」『クライシス』8号、社会評論社（1981年夏）：131-47。
- 2) シルビア・ブラウン浜野「女性・人権・フェミニズム—アメリカからの展望について」『女性学研究』4号（1996年3月）：1-25。
- 3) リサ・ブルーム「ルーシー・リッパード著 *Mixed Blessings* における人種、民族、ジェンダー」『女性学研究』8号（2000年3月）：17-30。
- 4) レベッカ・ジュニス「中心から、どこへ—*From the Center* と『狙撃者の隠れ家 (*Sniper's Nest*)』展について」『女性学研究』8号（2000年3月）：31-46。
- 5) ローリー・トビー・エディソン「周縁的コミュニティで創作する女性アーティストとして—社会変革のための芸術をめざして」『女性学研究』9号（2001年3月）：5-15。
- 6) タニ・バーロウ「地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える（上）」『女性学研究』9号（2001年3月）：30-56。
- 7) タニ・バーロウ「地球規模の枠組みのなかで「国際的フェミニズム」を教える（下）」『女性学研究』10号（2002年12月）：92-109。
- 8) ホープ・ルイス「「イルア」と「女性性器切除」のあいだ（1）」『国際文化』5号、大阪女子大学人文学科国際文化専攻（2004年3月）：57-90。
- 9) ホープ・ルイス「「イルア」と「女性性器切除」のあいだ（2）」『国際文化』6号（2005年3月）：63-106。